

健康文化

もの忘れ

今井田 二三子

患者さんの中には、痛みとか痒さといった日常よく使う言葉はスラスラと伝えられますが、少し改まった言葉になると「それ、なに、その一」と言葉がなかなか出てこない様子で、聞く側も何を言われたのか種々と思い巡らせ助けを出そうとしますが、全く見当のつかないまま会話の途切れることが間々あります。それが数年前より私にも同じような現象が起き始め急に要り用な物を頼もうとして「それ、なに、あの一」と言っているのに気付き愕然とすることがあります。更に困ることは顔をよく知っている人の姓名が咄嗟に浮かんでこないことです。まさかそんなことになろうとは知る由もなく、患者さんのカルテの索引を姓のアイウエオ順にしたものですから私一人の時に、突然、それも日頃の顔見知りであるからと診察券なし、保険証なしで来院されますと、さてこの方の姓の頭文字の始まりはアであったかイであったか、記憶の脳細胞を短い時間でフル回転をさせなければなりません。それで思い出せればよいのですがワまで辿り着いてもまだ思い出せないときの惨めな気持ち、遂に意を決して恐る恐る「お名前は」と尋ねますと「洋子」などと名前だけが返ってきますと万事休す、またアからやり直さなければなりません。また紹介状のような短い文章を書くのにも辞書の厄介にならねばならず、たまたま急いで一気に書き上げて再度目を通すと心と書くところを信と書いているのを発見しびっくりしたり、がっくりしたりしています。或る時、予防注射の間診に出かけた際に眼鏡を忘れ「眼鏡がなければ、我が目がなきが如し」とぼやいた言葉が耳に入った衝立の向こう側の先生から「歯は」と声がとんできました。「歯は自前」と応酬しながら、もしかしてその先生も入れ歯を忘れて出かけられた経験があったのではないかと嬉しいような、またわびしいような気持ちになりました。

さて最近の最大の忘れ物といえば、つい先日のことです。その日は遠方に重症な患者さんがあったため、日頃の往診、訪問診療のコースを変えて遠距離の家から始め、診療所から100mほどの一番近くの方を最後にしました。訪問

診療を終え、もし夜の診療までに時間が在れば入院中の親戚、知人を見舞いたいと思い急いで帰宅し時計を見ますと3時30分を回った所でした。まだ病院まで行く時間があると思い、取り急ぎ見舞の品を用意して外へ出たところ、私
が家にいる限りは修理、点検以外はいつも車庫にあるはずの車が見当たらない
ではありませんか、すわっ盗難と思い早速110番へ電話をしました。明日か
らの往診はどうでしょうか、買い物は、病氣見舞は、私の頭の中は明日からのス
ケジュールの組み立てに混乱し、お巡りさんの状況聴取に上の空で答えていま
した。丁度その時、家の者が「その辺りを一寸みてきます」と言って、お巡り
さんの制止も聞かず出ていったかと思ったら、暫くして「車があったですよ、
Aさんの家の側の柿畠のところに」と言って戻ってきました。「えっ、それ、私
が最後に車を停めた場所」。Aさん宅を出た私は重い鞆を提げて歩いて帰ってき
たようです。お巡りさんが言いにくそうに「気を悪くしないで下さい、もしか
して、もしかしてですよ、思い違いということはありませんでしょうか」とき
りだされ、車の無事な姿を見て、また明日からの仕事に支障のない嬉しさで「あ
ります、あります、大いにあります」と即座に返事をしましたが、以前であつ
たら耐えられない間の悪さ、恥ずかしさを感じただろうと思います。そうした
感じの薄れてきていることにもまた愕然としました。

さてこれから先の私自身に対する予防対策はどうしたものか。

鮮明に目に映らなかったものは鮮やかに記憶されないと云った友達の言葉を
思い出し、まず最初に老眼鏡を換えるべきか換えざるべきか、今、老眼鏡に問
いかけています。

(内科開業医)